

## 人はなぜ詩を詠むのか

### 加納留美子著『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』を現代批評の視点から読み解く

小笠原 淳

#### 一、人はなぜ詩を詠むのかという問い

加納留美子著『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』（以下、本書）は、蘇軾詩に見られる特殊な反復性に注目し、その「自作参照」という前例のない手法が、蘇軾の生涯と詩に特別な意味を付与していることを、詩語の変遷を追った分析によって明らかにしたものである。詩の分析に留まらず、弟蘇轍との親愛や徐州での黄河治水の成功体験、黄州左遷などの詩人の生涯における重要な体験を突き合わせて考察し、蘇軾の詩作における自己相似的な特徴、相似性を基点として拡張されていく、立体的な連作詩の構造を浮び上らせている。

本書の自作参照をめぐるテキスト分析的なアプローチは、現代詩の研究とも響き合う。度重なる貶謫に遭い、波乱に満ちた人生のな

かでその生涯をかけて詩とは何かを追い求めた詩人の詩を読み解くためには、体験と詩文とを相互に参照する分析手法が求められるのである。作家論と詩論とが分かちがたく結びついているところに本書の魅力がある。

現代批評においては、あらゆるテキストは他のテキストの吸収と変形による引用の織物とされ、テキスト間のつながりは普遍的なものとして認識されることが多々ある。しかし、典故という手法を考える際には、注意が必要である。中国文学における典故とは、いわゆる匿名性のテキスト、或いは間テキストとは異なり、儒教伝統と士大夫の教養を確認し合うような特別な意味合いを備えているからである。しかし、それにしても、蘇軾が印刷技術の発達を背景として、その人生の節目において過去の自作を参照し、連続性のなかで新たな詩を生み出していくといった循環、営為はきわめて現代的な手法であるように思われる。したがって、筆者には加納氏が提起す

蘇軾の自作参照が、当時としては斬新な手法であったということ  
が十分理解された。

さて、作者は冒頭において、本書の背景に於かれた大きな問題意  
識について触れている。

蘇軾という一個人に着目してその作品世界を論究し、併せて全  
ての詩人に通じる普遍的な課題へと切り込むことに、本論のも  
う一つの意義がある。

作者は本書を数多ある蘇軾の作家論に留めることを潔しとせず、  
人間が詩を詠むことの意味という根源的な問いかけについての答え  
を探求する姿勢を見せている。「詩を詠むことで人は何を成し得る  
のか」という本書の問いかけは、文学における命題の一つであるだ  
ろう。その意味でも、分野を越えて本書を読む意義は大きい。小論  
は限定的な内容になるが、現代詩研究の立場から幾つかの論点に焦  
点化して、『蘇軾詩論』を読み解いてみたい。

## 二、詩人と風景

サブタイトル「反復される経験と詩語」で明確に打ち出されて  
いるように、本書は蘇軾の生涯の反復性（在朝―外任―貶居）の  
繰り返しと、試作（詩語）の反復性とが有機的な関係を保ちなが  
ら機能していることを探求するものである。作者が本書で提唱した  
「自作参照」とは、「過去に詠んだ自作の表現・構成等を踏襲し、

新たに詩を詠むという手法」である。

蘇軾が過去の自作を典故と見なすような手法を用いていたこと  
については、すでに先行する研究があり、主に二つの事例が挙げら  
れている。錢鐘書は、蘇軾が自身の生み出した表現への自信から「幾  
次三番的用（幾度も繰り返し用いた）」とする心的要因を指摘し  
たのに対して、内山精也氏は印刷媒体の普及、周囲からの影響など  
の外的要因を「自作典故」の根拠としている。加納氏はこれらの内  
的／外的な要素を踏まえたうえで、景物への接触を端緒とする自作  
参照という手法、作法から蘇軾の詩を解きほぐしている。自作参照  
という手法は、詩人に新たな思考をもたらし、自己を肯定し、救済  
し、そのことが成果に繋がってゆくとする。こうして見ると、自作  
参照は手法、作法であるのと同時に、波乱の生涯を生きた詩人の処  
世であったようにも考えられるのである。

「自作参照」の具体的な方法は、「詩語レベルでの踏襲」、「作品  
内容・構成に関わる踏襲」に大きく分類されている。たとえば、「詩  
語レベルでの踏襲」では、「既存の表現を換骨奪胎して用いたもの」  
の一例として「紅波」という詩語が取り上げられている。しかし、  
この詩語がどの原詩から引用されたものなのか、どの語を換骨奪胎  
しているのか、或いはそれが詩人独自の用法なのか、これらの識別  
はきわめて難しい判断と作業になるだろう。判断の基準が恣意的に  
ならないように、予め研究方法を示しておく必要があるように感じ  
た。

さて本書では次のような事象が検討されている。第1章では、  
徐州時代の黄河決壊と対峙した経験が、如何に詩文に反映されてい  
るのかを論じている。第2章では、自然現象に「天」の意思を見出

し、希望を仮託する詩人の姿を浮かび上がらせている。第3章では、雨の情景や景物を用いた蘇軾兄弟の親愛表現の差異について探っている。第4章では、蘇軾の詠梅詩が関山の梅花を端緒として生成されていく過程を明らかにしている。第5章では、蘇軾が描く惠州の羅浮山の特徴について論じている。第6章では、中原とは異なる空間、海南時代の詩における風景描写に迫っている。

この章立てからも明らかのように、詩人と風景・景物との関係性を探求するのが、本書の全体を貫くテーマである。蘇軾が中心から周縁への終わりなき旅、在朝から放逐の人生パターンを繰り返すなかで、幾多の季節にめぐりあい、景物と接触し、或いは再逢することで、往時の自作詩が往年の感情と共に強く思い起こされ、そのノスタルジーや靈感に突き動かされるように、新たな詩が生み出されていくというメカニズムがここに看取される。たとえるならば、蘇軾の生涯の反復性が縦糸であり、彼が移動する先々で出逢った景物はちようど横糸のようなものである。この二つを縫い合わせたものが、その成果である詩というわけだ。

ところで、詩人と風景との関係は、いわば日常的な習慣化されたものではなく、往々にして異化されたものとなる。たとえば、ワーズワースの描いた湖畔の水仙、陶淵明の南山、楊牧の詩における台湾花蓮の海辺。詩人たちは、風景や景物を時間をかけて咀嚼し、日常性を剥ぎ取った異域、心象風景の空間として描くことがしばしばである。蘇軾の詩にも、このような異化の力が働いていると考えられる。さらに注目したいのは、詩人が「移動すること」によってもたらされる詩的な反応である。移動することによって、詩人が見る風景は大きく変じていく。特に遠地に流された中国の詩人たちの

眼に、南方の風景は異国のように映じられたに違いない。釜谷武志氏は中国の古典詩における「風景の発見」について、次のように述べている。

もし彼らがずっと洛陽にいたとしたら、北方の山河の特質に気がついていただろうか。じつは中国北方の景色は、美しいとは言いがたい。しかし、北方の地を追われた者たちにとっては、故郷喪失者であるがゆえに、よけいに彼等の景色の違いが認識されたのであろう。<sup>(26)</sup>

ひとりの詩人が故郷や境界を越境すること、移動すること／移動させられることと、詩が生み出されることの間には、明らかに強い因果関係が存在している。新たな情景への出逢いや再逢だけでなく、移動に伴って揺れ動く自身の心境が風景に仮託されて、詩として結実するからである。蘇軾の詩もこの「移動すること／移動させられること」という動きと密接に関係している。だからこそ、それが蘇軾独自のものであったかということは問われなければならない問題だろう。貶謫された中国の文人が数多くいるなかで、移動や反復性と景物、詩作との関係が、蘇軾独自のものであったということも明らかにするには、たとえば韓愈や柳宗元らが詠んだ詩との比較検討が必要であると思うからである。

### 三、梅花詩における語りの転換と問いかけへの回答

第4章の「梅花の「魂」」は、秀逸な詩論である。墨梅画が使われた本書の装丁からも、パネル当日の談話からも本論に対する著者の思い入れが感じられた。この章では、黄州左遷を境として、牡丹から梅花へと移ったと指摘される蘇軾の詠梅詩生成の過程が、鮮やかに浮き彫りにされている。蘇軾の梅花描写の端緒とされているのが、深刻な葛藤・苦悩を抱えながら黄州へ向かう道中で邂逅した孤独で美しい梅の花であり、それを詠ったのが「梅花二首」である。蘇軾は「梅花二首」において、自らの苦悩を吐露するように「誰にも顧みられず咲く孤独な花を目の当たりにし、自身を重ねて慨嘆した」<sup>6)</sup>。このように、其一は、逐客である自身の境遇を重ね合わせるように、蘇軾の視点から梅花が語られる。これに対して、其二では誇りと孤独に苛まれた複雑な人格を有する梅花の視点による語りの転換が起きている、と加納氏は分析する。すなわち、このようなシンメトリカルな構造、流された詩人と梅花との「双方向的な交流」が解き明かされるにつれて、初めて「梅花二首」の呼応関係やその構造に込められた作者の意図が浮び上ってくるのである。

筆者は加納氏のこの読みは読み手の想像に大きく委ねられたものであるとも思う。そしてそこにこそ詩の研究のダイナミズムが存在するとも思う。一方で、この読みに疑問が残らないでもない。筆者の初歩的な分析になるが、其二でも其一同様に、人知れず咲く孤独な梅花に作者本人の心境が仮託されている、それはやはり蘇軾の視点だとも見えるからである。蘇軾は梅花に独自の人格を持たせたということができるが、自らの分身として、自身の視点を残したままに梅花を擬人化して描いているともいえるのではないか。其二にもやはり蘇軾の願望のようなものが確かに読み取られるからだ。

其二の末句では、「水の流れに浮かび、あなたを黄州まで見送ろう」と、落花後の梅の花びらが流れ行く先の空間までも詩に取り込まれて、そこからは蘇軾の視野の広さ、空間把握の特異性が理解されてくる。縦横に広がるその俯瞰的な視点は、「我欲乘風掃去」など月や天界へと及ぶこともあるようだ。本章を通じて解き明かされるのは、関山での梅花との邂逅から入魂へと繋がる蘇軾の詠梅詩の生成過程と、自作を参照しつつ構築される有機的な梅花詩群の総体なのである。

ここで、本書の命題、「人間が詩を詠むことの意味」に立ち返り、思考しなおすとき、新たに見えてくるものがある。それは、人が詩を詠むことは、活きることに等しいということである。いま自分がなにをなすべきなのか、どこにいて、これからどこへ向かうのか。詩人にとって、詩とはそうした答えの出ない永遠の問いかけである。

加納氏は、蘇軾は景物、自然現象から天の意思を意識し、その意を推し量り、詩を詠むことで自らの願望を提示し、波乱の生涯を乗り越えんとしたと述べている。<sup>6)</sup> すなわち、蘇軾は詩を詠まずにはいられなかったという一つの答えが、言外に導き出されるのである。困難な現実と直面し、詩を詠むことで厳しい環境を受け入れながら生きた詩人の痕跡が、本書を通じて蘇軾ってくるようである。

#### 《注》

(一) 加納留美子『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』研文出版、二〇

二二年、三頁。

(二) 同上、三頁。

(三) 同上、八頁。

- (四) 同上、十二頁。
- (五) 同上、十五頁。
- (六) 釜谷武志『陶淵明 〈距離〉の発見』岩波書店、二〇一二年、一六八頁。
- (七) 加納留美子『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』、一二六頁。
- (八) 同上、七四頁。